

Title	声明資料『般若理趣経』における加点博士とその改変：国語音韻資料としての意義
Author	尾山, 慎
Citation	文学史研究. 44 卷, p.81-95.
Issue Date	2004-03
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

声明資料『般若理趣経』における加点博士とその改変

国語音韻資料としての意義

尾山 慎

序

本稿で検証対象とする『般若理趣経』（以下理趣経）は、真言宗における根本経典の一つで、古今通じて宗派において中心的に用いられている重要なものである。⁽¹⁾ 本文ののべ字数は二七〇〇余字で、そのほぼ全てに声明博士が加点された写本版本が、管見に入るだけで数点確認される。同宗において、ここまで長大な本文に連綿と博士が加点された漢文直読声明は希有であって、しかも漢音で読誦するということから、その資料的価値については既に指摘されてきた。⁽²⁾ 本稿では、従来の写本別研究、すなわち奥村三雄氏による京大蔵本研究、⁽³⁾ 沼本克明氏による高山寺蔵本研究、⁽⁴⁾ 花野憲道師による仁和寺本影印解説を参照しつつ、特に京大本及び仁和寺本についてさらに調査考察を進めた。加えて、従来取り上げられてこなかった写本のうち、京大本や仁和寺本と同系統の博士である五音博士が加点されたものも対象とする。なお、博士が加点されている現存写本および版本では、この五音博士で加点されているものが最も多く、これは現行でも使用される博士体系である。

本稿で検証対象とする諸本は、同一写本中で博士の訂正がなされて

いたり、同じ五音博士でも別系統と見なさなければならぬ本がいくつか存在するなど、必ずしも一様でない。同じ五音博士という記譜体系に拠っていながらも生じているこの異同からは、いかなる傾向が読み取られ、そして博士が改変されるということは何を意味しているのか。本稿はこのことの究明を目指し、またそれを通して理趣経の資料的価値を改めて位置付けたい。

ふつう、国語音韻史研究に有益である声明資料といえ、第一に和語や漢文訓読体の本文をもつものが挙げられると思う。それに対し、理趣経をはじめとする漢文直読資料は、もっぱら古代日本漢字音の復元資料としての価値が指摘されてきた。とはいえ、必ずしも理趣経が日本語音韻と切り離された資料であるというわけではないであろう。漢文だけの本文を直読する、一見そこに日本語の要素はないが、読誦するのは日本人であった。つまり、通常は日本語を母語としている人間が読む以上、漢文直読資料にも日本語音韻の影響があったと考えられるのである。そしてそれが、博士加点の態度の改変と深い関係を持っているのではないか。本稿はこのような見通しをもって臨むものである。

1 五音博士と諸本の様相

五音博士は、図1のように文字通り五つの音階で構成されている。この五音をひとまとまりとして、初重、二重、三重という三段階が存在し、のべて十五の音階を持つ(図2)。なお、白抜きになっているのは、音として存在はするが、高すぎて、あるいは低すぎて実際の発音はほとんどし得ないという音である。

理趣経本文では、二重の、宮、徵までの四種の博士によってのみ構成されていて、これは今回検証する五音博士加点本に共通している。また、この博士は組み合わせることが出来、たとえば角徵(上昇調)、商宮(下降調)といったように音調変化も表現されていて、このようなものを複合博士とよぶ。

(図1)



(図2)

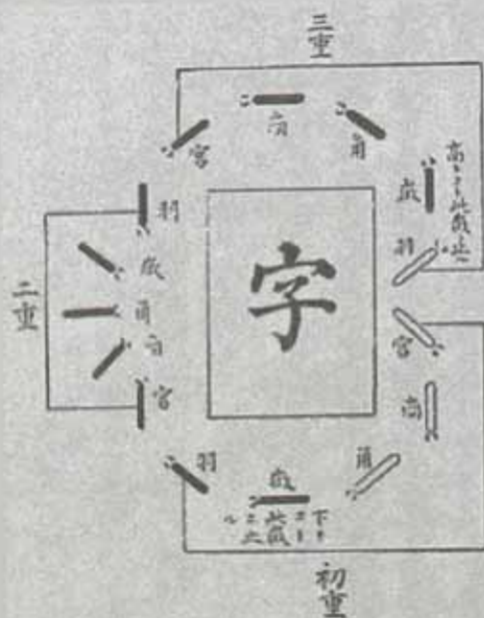
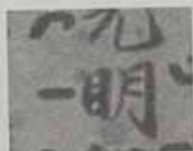


図1、図2: 『南山進流声明類聚附伽陀』(松本日進堂一九九七)より転載

(図3) 単独博士と複合博士(仁和寺本より)

単独博士

(角)



複合博士

(商宮)



このような博士の組み合わせ別に、諸本で分類調査した結果が次の表Aである。

表A 諸本の構成博士

	単 独 博 士	二 つ 組 合 せ	三 つ 以 上 組 合 せ	用 例 数
京 大	61.5%	38.2%	0.3%	2250
京大朱筆	55.8%	43.9%	0.3%	2250
仁和寺	40.5%	43.9%	15.6%	2787
三寶院	42.0%	28.2%	29.8%	2540
文明十五	56.3%	42.8%	0.9%	2580

※褪色・虫食いなどによって判別が難しい用例はあらかじめ除外している。そのような不確定例は京大本に0・8%、仁和寺本に0・2%、三寶院本に0・1%、文明十五年版に0・4%存在する。なお、京大本や文明十五年版は經典末尾部分で博士加点かなされていない部分があり（褪色などではない）、そのために、用例数に若干の違いがある。

※「京大朱筆」とは、京大本内で、朱筆で書き込まれた訂正博士をいう。変更のない部分は京大本と同じデータをとっている。

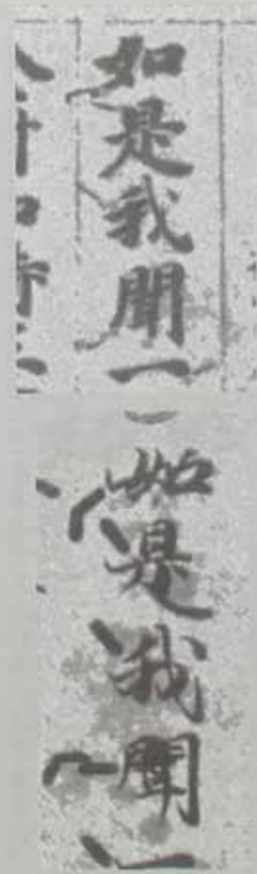
※組み合わせ、というのには先にも挙げたように、博士をつなげて音変化を持たせたもの（8）を指す。なお理趣経博士では、同じ博士を連続させたものは見られない。

では、この表に現れたデータをもとに考察を加えていきたい。まず京大本であるが、奥村三雄氏注3論文によれば、本書は「十三世紀末以前には廻り得ない」といい、十三世紀初頭に書写されている仁和寺本に比べれば少なからず遅れるということになる。しかし、五音博士の成り立ち⁽⁶⁾という点からすれば、仁和寺本の博士は本文書写よりある程度降ると思われる（注1仁和寺本の項参照）。現在のところ、具体的に仁和寺本との前後を証明するほどの手掛かりには恵まれないため、これ以上年代を絞り込むことはできない。ただ、加点されている博士の様相からして、京大本に付された博士が先行するのではないかと考えられる。というのも、京大本で構成される博士には単純なものも多く、単独博士の量がとくに多いからである（表A参照）。奥村氏は注3論文の注において、高野山三寶院本のもつ、比較的複雑な博士と、それよりは単純な京大本および同大学谷村文庫本の博士を比較された際に、「それ（筆者注：京大本・谷村文庫本）から発展したとは考えられるが、その逆は考えがたい」と述べられている。つまり、単純なものから複雑なものへと博士が改変・発展するということがいえる。このようなことから、理趣経五音博士のあり方として、現存では京大本の博士が最も古いものであると考えられるわけであるが、では、複雑化するということにはどういう意味があるのだろうか。その為には理趣経博士の、基礎をなしている音調は何であるかということとを把握しておかねばならないが、結論を先取りすれば、理趣経博士の調値は、四声の音調に相当に依拠しているとみられるのである。これは沼本克明氏が高山寺本の検証においてすでに指摘されていることである⁽⁸⁾。そこで、筆者も四声点をもれなく備える仁和寺本において調

査したところ、沼本氏とほぼ同様の結果が得られた。すなわち、氏の検証によれば、高山寺本博士と四声の一致率は九〇・二%、具体的用例数でいえば四声と一致するものが四五三例、不一致のものが四十九例であるという（沼本氏は、理趣經のうち初段といわれる最初四十三行目までを検証された）。一方仁和寺本における四声との一致率は八八・九%である（一致四八〇例 不一致六〇例）。このように、両本が同様に高い比率で四声の調値を保存していることが知られたのである。ここで注意すべきは、高山寺本と仁和寺本では、まったく博士の体系が違ふということである（高山寺本は京都の相応院流、仁和寺本は高野山の南山進流である）。それでもなお、四声の調値での一致率という点で比較した場合、同様の傾向を示したということは注目に値するであろう。左に、参考として具体的に写真版を抜粋掲載するが、これを見てわかるように、高山寺本と仁和寺本とは博士の姿が違う。高山寺本は四声点の位置から博士が出音しており、その角度や方向も仁和寺本とは異なっている。高山寺本博士は、音の上下をそのまま線の方向で表すいわゆるネウマ式博士（流派を冠して相応院流博士とよぶことが多い）であるのに対し、仁和寺本は前述の通り五音博士であり、音の上下は線の方向や上下と必ずしも一致しない、いわば抽象的記譜体系である。このように、記譜の方法は異なるものの、調値という点では、両者はほとんどかわらず、四声をその下敷きとしていることが知られるのである。

(図4) 高山寺本博士

(図5) 仁和寺本博士



博士が四声点の位置から出ている

博士はすべて経文の左側

本来、たとえば五音博士で漢字音の声調を表現するとすれば、単独博士（平調）か、もしくは二つ組み合わせの複合博士（変化調）だけで事足りるはずである。しかし、現存理趣經では、よく一致するとはいつても、すべてがそのように単純な博士だけでは構成されていない。表Aで見たように、京大本では割合単純な博士で加点されているものの、それ以降の写本では三つ以上の博士を組み合わせた複合博士も比較的よく含んでいる。四声の音調を博士で表現しているということは前述のとおり疑いのないところであるが、その中にある、特に多重の複合博士はどのように位置付けられるべきものであるのか——理趣經博士の基本が四声博士の表現であることを思えば、これら、四声の音調とは言い難い複合博士は、理趣經傳承の過程で、博士加点に関する内省があったその際の改変によって生まれたものであったと推察される。このような改変の理由は、当然のことながらひとつではないと思われる。博士の改変には様々な要因を想定せねばならない。ただ、現在に至る声明傳承の正確さ、言い換えればその保守性の高さに鑑みるに、声明

博士の改変は、安易に行われるものではなかったと思われる。無意味な改変、徒な変更、杜撰な伝承ということか可能性として低いのであれば、博士のありよう及びその改変様相の、その意味を考究する必要があるだろう。

多重の複合博士には、漢字の音節、アクセントとしてはそくわなないものがある。漢字音というのは漢字に付随する要素であって、字義の表出という点では本来不可分の関係にあるはずである。弘法大師空海が「声字分明ニシテ実相顕ル」(『声字実相義』)と述べたように、經典読誦に際しては、正確な音、つまり四声に拠った読みが志向されたことは想像に難くない。理趣経においては、博士によってそれをかなりの高い比率で保存伝承している。では、漢字アクセントを表しているわけではない、いわば複雑化した複合博士の加注意義は何なのか——結論からいえば、これらは経文の内容理解を助けるために、ある要所をその博士の旋律によって強調しているのではないかと考えられるのである。このような博士を以下「音楽的裝飾博士」とよぶか、具体的に理趣経博士でいえば、「角モドリ角商」という四博士を連ねたものかこれにあたる。この博士は經典の始まりの常套句である「如是我聞」の「聞」字や、「十七清浄句」といわれる、理趣経においてもっとも重要な教理を示す句の、それぞれの切れ目毎に付されていたりと、明らかに経文の内容的要所で付されていること知られるのである。なお理趣経本文部以外であれば、この音楽的裝飾を施された博士は比較的良好に見られる。たとえば真言宗法要で常用する声明でも、一字に対し、二分間近くかかる、技巧を極めた博士が付されたものも存在する。¹⁰このような長大な博士は、高低変化が一字でのべ数十回に及ぶのであっ

て、言うまでもなく字義表出を担う漢字アクセントが表現されているわけではない。むしろ漢字アクセントからの脱却、つまり、博士の音楽化の顕れである。このようなことから、理趣経博士における多重複合博士は、音楽的な裝飾によって經典の文言を強調し、またそれを通じて理解の一助を担わせるというねらいから記譜されたものと位置づけられよう。

では、単独博士が、二つ組み合わせの博士へと変更されている場合についてはどのように理解すべきであろうか。これらの博士は、いわば単独博士であり、漢字の音調を示すと理解されるものである。果たしてどのような意図で改変が加えられたものなのか。理趣経現存諸本は直接の親子関係にあるとはいえないものばかりであるので、博士の改変については同本中に書き込まれた朱書きをもつ京大本を中心としてみていきたい。次章では単独博士から二つ組み合わせの複合博士への改変を調査し、さらにその要因について考察したいと思う。

2 字音の音節構造と理趣経五音博士—特殊音素の自立化—

五音博士は、各博士同士に長さの差別がない。従って音声として発するとき、各音階は互いに等時の音節量を指示しているということになる。理趣経では、漢字二字に一博士が充てられるなどということはなく、一字に対し必ず一博士は付されている。つまり字音一音節に少なくとも一博士が対応しているということになる。諸本中、京大本を見てみると、のべ約二五〇例において、この一博士すなわち単独博士が、朱で改められ、二博士へと修正されていることが確認される。更に、これらの博士が訂正されている字音を検証したところ、特に特殊

音素、すなわち二重母音の第二要素、撥音尾、入声韻尾（促音）を含む字であることが判明した。特殊音素は日本語音韻の音節構造としては一応変則という扱いを受けており、これらがその字音の主音節に対して従属的なのか、あるいは自立的な一音節であるのかという点については、従来議論を呼んでいるところである。その特殊音素を含む字について、単独博士が二博士へと変更されている—このことは何を示唆しているのか。以下、特殊音素の種類別に用例を分類し、検証する。検証にあたっては、C||子音、V||母音、N||n・m韻尾とし、特殊音素を含む字音の構造をそれぞれ、CVV（二重母音）、CVN（撥音）、CVC（促音・入声音）で表し、分類する。以下に写真版で具体例を挙げておく（仁和寺本写真版より抜粋転載した）。

CVV自立

CVV非自立

CVN自立

CVN非自立



CVC自立

CVC非自立



日本語音韻は、原則として開音節構造であり、CVの連続が基本となる。つまりCVで区切られるのがふつう日本語における一音節である。では、CVV、CVN、CVCにおける、V₁やN、及び尾子音Cは、果たしてひとつの独立した音節として認定されているのだろうか。声明博士を備える理趣経では、これを博士加點状況からはかることが可能であると思われる。すなわち、特殊音素を含む一字に対してひとつの博士、つまり単独博士しか付されていない場合は、特殊音素に対して特定の博士は与えられていないことであり、それらは主音節CVに従属的であると見なされる。ところが、これに新たに博士が付与されて、二博士となっているものは、特殊音素が特定の博士を獲得していると言え、独立した一音節と認められているということになる。従って、このような博士改変を、特殊音素の自立性向上によるものと位置づけることができる。なお、この問題に関する先行研究として、浅田健太郎氏の論を⁽¹⁾ここで挙げておきたい。氏は声明集という法要で常用する声明曲を集成した本のうち、広島大学所蔵本と昭和時代に採譜された本の対校をされ、次のような事項を明らかにされている。廣大蔵聲明集から岩原五線譜（昭和時代のもの—筆者注）への変化は、全体として特殊モーラが自立性を獲得していく方向で流れており、自立性を失う例は少ない。

非自立的だった特殊モーラが自立性を獲得する程度は、音節の種類によって異なる。すなわち、CVV、CVN、CVCの順で自立性を獲得しやすい。

このように、声明集においては、時代が下るにつれ特殊音素が自立する傾向にあることを認めうるものであり、しかも自立しやすいもの

(CVV) としにくいもの (CVC) があるということが指摘されている。なお、特殊音素それぞれにおける自立性の相違は、窪蘭晴夫氏(浅田氏も引用) が論じられた⁽¹²⁾、現代日本の歌謡における特殊音素の自立性における相違と一致するのであり、日本語音韻のありようと、時間軸に沿った変遷という点を考えあわせても納得される指摘である。ところで、浅田氏が対象とされた声明集は、声明の集成本である。これに対し理趣経は単一資料であり、漢文直読の単独資料ではほぼ最大量の博士用例数を得られるものである。また先述のように、真言宗根本経典であるが故に、伝承の上で常に内省されてきたものであると考えられる。つまり化石的なものでなく、時代の流れに従った日本語音韻変化との関係が予想される資料である。

以下に、現存理趣経諸本中最古の五音博士を備える京大本(鎌倉時代後期成立か)本文中に加点された博士と、成立からおよそ二〇〇年以内の間に書き込まれたとされる(注1京大本の項参照)京大本朱筆訂正博士との比較をし、その変遷を検証、考察する。また、参考として他の写本及び版本一本の調査も併せて行う。京大本内部における二種の博士(元博士—朱筆訂正博士)の比較検証や、後発の諸本との様相の比較を通じ、その変遷のあり方が、浅田氏の指摘と並行的に捉えられるならば、理趣経が書写されていた時点ですでにその傾向があったことを認めることができよう。

調査結果を次の表Bに示す。

表B () 内は具体的用例数である。

		京 大	京大朱筆	仁和寺	三 宝 院	文 明 十 五
CVV	自立	57% (354)	70% (414)	78% (626)	77% (525)	72% (470)
	非自立	43% (264)	30% (204)	22% (168)	23% (159)	28% (257)
CVN	自立	33% (90)	56% (152)	72% (231)	66% (187)	57% (170)
	非自立	67% (180)	44% (118)	28% (94)	34% (96)	34% (96)
CVC	自立	14% (37)	13% (35)	15% (56)	12% (44)	11% (35)
	非自立	86% (237)	87% (239)	85% (315)	88% (315)	89% (290)

京大本本文中、約二五〇例の朱筆訂正博士があるが(表B「京大朱筆」の項目)、この修正が興味深い結果を示している。即ち、CVVとCVNにおいて「京大本」と「京大朱筆」を比較してみると、自立

の割合が上昇しているという点である。これは、特殊音素に対しても博士を付すという方向で訂正されていることを示していよう。京大本において博士が付されていなかった特殊音素のいくつかは、博士訂正者は新たに博士を与えてこれを自立したものと認定したのである。

本によっては本文に欠如があり、しかもその箇所が諸本ごとに違うので、写本間で一概に比較はできないが、表Bに示されるように、いずれの写本でもCVCにおける自立と非自立とは、非自立の方が割合として著しく多い。CVC、CVNのそれとは逆の傾向が認められるのである。これはつまり、CVCにおいては特殊音素の自立性が低く、CVCで一音節と認定されることが多かったことを示している。

また、CVNでは、京大本を除いて特殊音素Nで自立しているものが過半である。京大本だけはCVNにおいて自立と非自立の割合が諸本と逆転しているが、そのいくつかは朱筆によって修正を受け、これによって自立性が上昇している（修正後、自立の方がわずかに多数になっている）。この傾向はCVCVにおいて京大本で朱筆訂正されるにあたって、やはりVを自立化させている傾向が認められるのと軌を一にしている。なお、京大本の、CVNにおいて、若干自立性の方が低い数値であらわれたこと、そしてそれが朱筆で訂正された結果、後発の諸本と同様、自立の方が多くなっているというこの傾向は、京大本博士が諸本中最も古いものであるがゆえという点で納得されるものである。

更に言えば、京大本博士より時代が降る本の博士は、京大本より自立性が高くなっている点も傾向として首肯されるものであろう。このように、単独博士から二博士への改変の多くは、その分節観念に拠った改変であったという指摘ができる。しかもこの分節観念は、中国正音

の分節ではなく、日本漢字音の分節とみるべきである。特にNやCといった子音韻尾を独立した一音節扱いとすることは、開音節化に代表される漢字音の日本化、つまり日本語音韻体系の影響の現れであるといえよう。理趣経は漢文を読み下すことなく直読し、しかも音読するという点で、日本語の要素をもたないものではあるが、やはり日本語音韻と隔絶されたものではなく、その影響を看取することができるのである。

3 博士改変と分節

前章における検証によって、日本語の音韻体系（分節観念なども含めた）に影響をうけた博士の改変があったことを確認した。音韻変化や分節感覚というのは、いわば言語直感的なものである。たとえば、我々が、「信号機」/sɪnɡoʊki/ という単語を音節で区切るとする。その場合、

① /sɪN/ /goʊ/ /ki/

② /sɪ/ /N/ /go/ /o/ /ki/

③ /s/ /Nɡo/ /ok/ /i/

④ /s/ /i/ /N/ /ɛ/ /o/ /o/ /k/ /i/

①②はあり得ても、③④はあり得ないであろう。これは日本語を母国語とする者に備わっている分節感覚がそうさせるのであり、言語直感的なものである。したがって、たとえば①から②あるいは②から①のような分節感覚の変遷があったとしても、それを我々の誰もが確かに自覚することは稀である。これは音韻変化にもいえることである。つまり、音韻変化や分節観念の変化は、一種の無意識的な強制力である

といえ、それが博士の改変に顕現していると見られる。このような音韻変化に起因する博士加點あるいは博士改変の態度は、本稿1章で挙げた、音楽的裝飾化を志向した博士の加點態度とは確かに異質である。しかし、両者は複合博士の志向という態度、及び正音の漢字音に縛られないという態度という点で共通しており、衝突はなかったと考えられる。理趣經において、四声の調値は先にみたようにかなり保存されているが、それらに変更を加えて、音楽的裝飾博士を加點するという行為は、すなわち正確な漢字音を必ずしも守らないという態度に裏付けられている。一方、特殊音素の自立化も、正音としての中国字音ではなく、日本漢字音での分節で捉えた博士加點であった。このようなことから、両者は改変のあり方として同居していても問題はなく、あるいはまたその両方の要素を兼ねて持つ改変もあり得たと思われる。

そういう意味では、博士の音楽的裝飾化と音韻変化による博士変更という両者に、明確な線引きをし得ない面があることも否めないが、たとえば前章表Bの考察において見たように、ここに示されている数値は、日本語音節の分節観念との連関性がある博士改変であることが明白であり、また第1章にて取り上げた角モドリ角商という多重複合博士はその加點箇所からも、経文内容に関わる裝飾博士であることが疑いない。

ところで、右に述べた以外に、博士改変には次のような例が存在する。すなわち、京大本で、朱筆にて単独博士→二博士という修正をうけている用例のうち、前章において検証した以外の、CV、CSVの音節の字に関する修正である（単独母音字で改変されているものは認められなかった）。のべて二十六例あり、修正全体数からすれば一割

にあたる。この変更が何を意味するかということであるが、これは読誦の上で拍数の均質化を目指したものではなかったかと考えられる。現代仏教儀礼における、いわゆる「お経読み」という読誦方法とは、一音節の字音を二拍分にのばし、二音節字音と拍数を同じくするというものである。つまり経文一文字一文字を等時に読んでいくのである。理趣經においてもまた、そのような読誦上の等時性が志向され、この改変はそれによるのではないかと考えられるのである。これは、改変された博士の前か後、あるいは前後に二つ組み合わせの複合博士が存在しているということから推察されることである。筆者による書写をもとにしているが、具体例を例示しておく（太い線が改変された博士を示す）。

…意 志…（八七行目）

ㄣ

…切 事…（二二八行目）

ㄣ

…切 我 故…（一三三行目）

ㄣ

なお、これらが声調補正のための改変ではないことは、先の特殊音素を含む改変の場合も含めていえることである。このように博士が改

変される際、ときに音調が変わることかありえるか、それらの多くは四声とは一致しないのである。従って、拍数が増えることの意味を問うのがここでは妥当であろう。なお、諸本ではもとよりCVで二博士が加点されているものも確認されるが、それも、書写過程で、前述のような志向から改変されたものであるかもしれない。原本と呼べる物はおそらく失われているであろうから、確実に知るすべはないか、改変原理をそう捉えることとこの問題を説明し得ると思われる。この読誦上のリズム、拍数の問題については、京大本だけではいかんせん用例数が乏しいこともあって、本稿では例外扱いとするが、理趣経以外の声明資料も視野に入れて今後の課題としたい。

4 四声アクセントと日本漢字音

本来の漢字アクセントでは、四声すなわち下降調、上昇調、高平調、低平調の別がある（日本漢音は、厳密には平声と入声に軽重のある六声体系であるといわれる）。さらに文中では単音節字と多音節字が混在している上、特殊音素が頻繁に出てくる。そのような漢字音、アクセントをもとに付された博士に、改変が加えられているということはやはり注目に値する事実であろう。第2章において検証した特殊音素の自立化、その中には入声音の開音節化も含まれている。つまりは日本語の音韻体系に影響をうけた漢字音の変化であるか、換言すればそれは中国正音からの乖離である。先に空海の言を挙げたように、経典読誦に際しては四声を守るといふ風潮が、仏典受容のすくなくとも当初はあったはずである。仁和寺本において本文中もれなく四声点が付されているのもその現れのひとつといえる。ところで現代の日本漢字

音に四声の発音は残っていない。つまり我々日本人は、発音上、本来は字音に備わっていた高低アクセントの規則を守らずに使用している。しかし、アクセント記号としての四声点の加点状況を見た場合、ある時代を境に消えてなくなるといったことはなく、加点自体はむしろ時代が降った資料でも比較的よく目にするのであろう。声明集などでは、今もなお四声点が形骸的にもせよ残っているのである。それだけに、発音するうえでいつころ失われていったかを知ることが難しい。

しかし、和語中に漢語を用いている以上、和語に挟まれた漢語の中国正音か失われていくことは必定であったろう。四声か守られ得る環境ではなかったのである。その点、漢文直読の経典——たとえば理趣経では、仏典読誦の規範およびその保守性が、四声調値の保存を可能にしたと考えられ、同経の保存率はある意味で驚異的である。これが国語音韻史の研究上「第一等資料」と賞せられる所以でもあろうが、その中に現れている博士の変化には前章まで述べてきたような特質が看取できる。これらを安易に一括りにはできないが、日本語音韻の影響という点で、有機的につながっているといえることがいえるのではない。つまり、正しい漢字音（四声アクセントも含めて）を必ずしも遵守しないという態度によって、ある程度自由な作譜が可能になり、字音アクセントの表現にとどまっていた博士が、音楽的装飾をもって経文理解の一助とするという方法を獲得した。これは第1章にて考察を加えた博士加点態度である。その、正音を必ずしも遵守しないという態度は、漢字音の日本化という現象と表裏であると考えられる。しかもそのように日本化を遂げていることを、ふつうは鋭敏に自覚しえないはずで、内省は時に試みられたであろうが、その乖離をくい止め

るほどのものではなかった。これは、日本化した漢字音がその後、ひいては今日に至って現実に通用されていることが物語っている。漢字音日本化の顕著な例として、閉鎖音に母音を付加するという開音節構造への変化が挙げられる。これは、本稿でみたような特殊音素が自立化するという志向を促す要因のひとつであったと考えられる。

加点（改変）態度が異なるものの、第1章第2章でそれぞれ見てきた博士の加点、改変態度はそのように、漢字音の日本化、つまり日本語音韻の漢字音に対する影響という点で共通している。漢文で記された理趣経博士が、漢字音と深い関係をもっているのは当然だが、その漢字音を変化させたのは日本語音韻体系であったのである。

宗派で最も尊崇される経典のひとつである理趣経の声明は、特に厳密に伝授されたであろうし、その読誦態度も過去からの伝承に保守的であったと考えられる。しかも、漢文の直読、それも声に出して読むのである。我が国に資料数多ありといえども、その運用において、これほど日本語の要素が認められない資料は希少であろう。しかし、その理趣経においてすら、やはり日本語音韻の影響をうけたと思われる博士加点態度を見ることができるのである。

結

理趣経諸本では、同じ五音博士で加点されていながらも、単独博士をより多く擁するものと、複合博士を比較的多く擁するものなどの違いがみられ、さらに単独博士を複合博士へと改変している本も認められた。かかる一様でない博士のあり方について、検証考察した本稿の見解を改めて以下にまとめよう。

理趣経の博士は、沼本氏注4論文や、筆者による仁和寺本の検証によって、概ねは四声の調値をなお保存しているものとして位置づけられるが、一部で四声とは無関係といえる複合博士がみられる。これらを検証するに、経文の内容的要所で加点されていることがわかることから、内容理解の一助として博士の音楽性が機能していると指摘される。漢字アクセントをよく保存し、伝承している理趣経にあっては注目すべき事で、博士加点の態度として、漢字音との関係に希薄な一面が芽生えていることを示している。また、諸本中京大本では朱書きによる博士訂正がある。この博士訂正は、おもに特殊音素を含む字について行われ、その特殊音素を、自立した一音節と見なす変更が行われているという特徴が知られた。詳細に見ればCVV、CVN、CV Cそれぞれで差異が出ており、この順に自立性が高いということが判明した。またすべての項目において自立性が他の本よりも低い数値を示した京大本博士は、諸本中最も成立が古い。これらの結果は、特殊音素自立化の、時間軸に沿った傾向と合致する。なお、仁和寺本と京大本は博士が五五%しか一致せず、いわば直接の対校はあまり意味をなさない関係にあるのだが、それだけ博士の様相が違っているにもかかわらず、CV Cで見えた場合は、自立性の割合が同様に低い（CV VやCV Nではその割合に差がみえる）。本稿の検証によって、各音素の自立性の差異、とくに促音の自立性が最も低いということが理趣経においてもいえることが分かった。ところで、この検証の先行論として挙げた浅田氏注11論文は大変示唆的な論であるが、とくに、同一テキストが過去と現在とにおいて、どのように読まれるかを問題とされている点が重要である。本稿ではこの方法を、同一テキストの、書き

入れや諸本間での読まれ方の差異へと適用したわけだが、その結果、鎌倉から室町時代に成立している理趣経（とその博士）において、すでにその傾向があったことが知られたのである。

声明集は、宗派で教本として使用されるような常用の書であり、声明も、その長短や博士の種、成立時代という点で種々のものが納められている。これに対し、理趣経のような一経典中においても特殊音素自立化をはじめとする、日本語音韻の影響が現れていることは注目に値しよう。

声明伝承は、本質的に保守性が高い。たとえば今回取り上げた理趣経でも、頭の句といわれる本文部中の各区切れ部分の一節に付されている博士は、鎌倉時代の仁和寺本と現代声明で完全に一致するという事実が挙げられる。伝承していく上で徒に改変されるものではなかったことからすれば、博士の異同をただの異同として列挙するにとどめず、我々はその意味をこそ読みとるべきであろうと思う。現存理趣経に残された博士、そしてその改変は、単なる博士変遷として追うことができるだけでなく、その根元にある日本語音韻との連関性を読みとることができるといえる。このようなことから、理趣経の資料的価値は更に強調されるべきものであらうと考える。

注

(1) 博士が加点された理趣経として管見に入ったものは以下のとおり。なお書名が太字ゴシック体となっている前の四本が本稿で取り扱う諸本である。高山寺本は、沼本氏注4論を参照した。

仁和寺蔵本 建仁二年(1202)書写 朱声点 墨譜(五音博士)

後京極殿良経が亡母追善の為に書写した。花野憲道師によれば、博士は僧侶が加点したものであるという(注7参照)。卷末識語の「佛子□□」がそうであろうが、虫食いの為に僧名が知れない。声点・博士は精緻に加点されており、資料の保存状態は現存諸本中最も良好。五音博士が、高野山金剛三昧院の覚意という僧侶の発明であるという注6の説に拠れば、当該本博士の加点は少なくとも建仁二年ではありえず、時代は下ることになるかもしれない。ただ本文書写という点での成立では現存最古となる。

京都大学国文学科蔵本 鎌倉時代末か 朱声点 墨譜(朱入れ有り・五音博士)

奥村三雄氏注3論文で一部の博士について検証されている。声点は濁音字の、それもごく一部にのみ加点されていて、一見すると付されていないかのようである。墨書の五音博士だが、しばしば朱で改められている。奥村氏によればこの朱筆訂正は後代別人によるものという。同大学谷村文庫所蔵のものは、この朱で改めた方の博士に完全に一致するようで、このことから朱筆訂正は谷村文庫本成立の室町期までには行われたであらうということである。

高野山三寶院蔵本 鎌倉時代か 声点なし 墨譜(五音博士)

最初の二十二行分が欠落しているが、その他の状態はよい。博士は諸本中もっとも複雑なものが加点されている。※現在は高野山大学付属図書館に寄託されている。

文明十五年版般若理趣經 声点なし 墨譜（五音博士）

坂口茂氏所蔵本。本稿では『古版声明譜』（上野学園日本音楽資料室1995）にて影印を確認した。同書中にて影印解説をされている福島和夫氏によれば、本資料は刊期が確認できる印刷声明譜としては現存で三番目に古いものであり、当該版は高野山外で印刷された最初の声明譜であるという。文明十三年（1148）書写、同十五年、伊勢鈴鹿白子観音寺にて開版されたものである。

唐招提寺蔵本 鎌倉中期書写 朱声点 墨譜（五音博士）

本文の次に流通分、更に合利、廻向句を備える。合利、廻向を備えない仁和寺本と、経文の体裁としては異なっていることになるが、博士は仁和寺本との異同は二例のみでほぼ同じである。また声点の加点が濁音字のみという特徴がある。つまり、四声点は濁音標識としてしか機能していない。なお当該本は唐招提寺元管長によって蒐集された経典の一つで、当初から唐招提寺蔵であったわけではない。資料の状態は良好である。今回、本論中各表で小数点第一位（第二位を四捨五入）までをデータとしたが、唐招提寺本は仁和寺本との異同が少なく、両本の違いがこれに反映されないので、データとして挙げることを割愛した。

以下にあげるものは、博士の系統が全く違うことや、破損が著しく博士解説が困難が多いため、今回は検証対象外としている。

高山寺蔵本 鎌倉初期書写 朱声点 墨譜（相応院流博士）

本文、博士加点はともに僧侶によるという。ただし本文は三人の僧侶の手による（書体の違いから判断される）。博士は五音博士ではなく、いわゆるネウマ式とみられる博士（相応院流博士）。なお、同一句で繰り返しの博士は省略されていることが多い。保存状態は良好である。

高野山金剛三昧院蔵本 鎌倉時代か 朱声点 墨譜（五音博士）

首欠で最初ののべ九〇〇字分が知られない。高野山大の図書目録では平安期と注記があるが、博士が五音博士であることから、そこまではさかのぼることはできないだろう。あるいは本文だけが平安期書写かもしれない。朱声点もかなり付されている。全体として欠落部分・褪色破損が少なくない。※現在は高野山大学付属図書館に寄託。

大谷大学付属図書館蔵本 康仁元年（1150）書写 声点なし 墨譜（五音博士に近いもの）

勸請・本文・流通分・合利・廻向のすべてを備える。本文の博士は一見五音博士のようではあるが、博士の出音箇所が字の左部分の上・中・下の三種類あり、これによる音程の区別があると思われる。全て、字の左中央部分から出音する仁和寺本などの博士とはその点で大きく異なる。また複合博士でも直角に折れてつながるものがあり、これも仁和寺本などでは見られない博士である。

高野山三宝院蔵版本 室町期か 朱声点・朱仮名 墨譜（五音博士 墨書きで一部を訂正）

虫食い・破損かしははあるため解読できない部分もある。朱

で声点かほとんどの字に加点してあり、同じく朱にて振り仮名か付されている。振り仮名は経典の後ろの方ほど頻繁に付されている。また博士を時々墨書きで改めてあるか、塗りつぶすように書いてあったりして、判別が難しいものもある。奥書・識語の類はあったようであるか、残念ながら虫食いと褪色によってほとんどか失われ解読できない。版本であること、仮名の特徴、博士の相などから本書の成立は室町時代と思われるか、今のところ確たる裏付けは取れていない。※現在は高野山大学付属図書館に寄託。

(2) 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(汲古書院1997)第四章一節「節博士に関する諸説」に、「『孔雀経』『理趣経』の如き読誦經典の様なものがまず日本漢音の第一等資料となるはずである」との指摘がある。

(3) 奥村三雄「声明資料『聖寶印理趣経』について」(『国語国文』第32巻2号1968)

本稿では京大本と呼んでいるが、奥村氏は本資料巻末に「聖寶」印が捺してあるために独自にこう呼ばれている。今のところ、この印が何を目的にしたものかは不明である。ただ、醍醐寺の理源大師聖寶本人によるとするのは、時代的にも難しいとのことである。

(4) 沼本克明「高山寺理趣経鎌倉期点解説並びに影印」(『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院1997)

(5) 花野憲道「声明資料『般若理趣経』博士加点本」(『訓点語と訓

(6) 新井弘順「真言声明南山進流について」(『古版声明譜』上野

学園日本音楽資料室1995)に次の指摘がある。「一二七〇年(文永七)には、證蓮房覚意(一二三三〜九三以降)により、画期的な声明の記譜法―覚意の五音博士―が考案された」

また、桜井茂治氏は、「真言宗『声明』の墨譜の系譜とアクセント」(『国語学』51巻 1962.12)において、覚意と五音博士について、「醍醐流のような譜を、高野流に改めた、これくらいのことだったのであるまいか。いわば覚意は節博士の発案者というよりは集大成者といった方が適切であるのかもしれない」と指摘されている。

(7) 花野氏注5論文に「仮名字体などから推して別筆奥書の「佛子□□」と同人の加点であろうと考えられる。」とある。

(8) 沼本氏注4論文第三節項目bに「博士と声点との出の一致率を見ると非常に高い比率を示す」との指摘がある。なお、この場合一致する四声は、韻書から学習して得られる調値ではなく、日本の伝統的漢音のアクセントであるという。

(9) 『弘法大師空海全集』第二巻(筑摩書房1983)

(10) 文明四年(1473)版声明集より『如来唄』(『古版声明譜』上野学園日本音楽資料室1995より転載)。常用する声明のうち、一文字に対して最も長い博士が付されるもののひとつ。ただし、文
言は「如来妙色身世」のわずか五文字である。



(11) 浅田健太郎『声明資料による音声・音韻に関する歴史的研究』

(広島大学大学院博士論文173-187頁 2002)

(12) 窪蘭晴夫「歌謡におけるモーラと音節」(『文法と音声2』くろしお出版1998)

※高山寺本および仁和寺本の写真は、花野憲道師所蔵のものである。師のご厚意により拝借したものを転載させていただいた。茲に記し厚く御礼を申し上げる次第である。